

PT・OT ビジュアルテキスト

国際 リハビリテーション学

国境を越えるPT・OT・ST

contents

● 序	河野 眞	3
● 国際リハ関連用語集	寺村 晃	17

第1章 国際リハビリテーションの基礎

① 国際リハビリテーションとは	河野 眞	20
1 国境を越えるセラピストの活動		20
2 国際保健・グローバルヘルス		21
3 国際看護		22
4 国際リハビリテーション		23
■ コラム：国際リハ・セラピストはいつも途方に暮れる		24
② 途上国のリハシステム	大澤諭樹彦	25
1 途上国における障害者の状況		25
2 リハビリテーションの現状と課題		26
1) 不足するリハビリテーションサービス 2) 都市に集中するリハビリテーションサービス 3) リハビリテーション紹介システムの未整備		
3 リハビリテーションの形態		27
1) 施設型リハビリテーション 2) アウトリーチリハビリテーション 3) 地域に根ざしたリ ハビリテーション 4) 代替リハビリテーション		
③ 途上国の保健・医療システムとリハビリテーション	渡辺 長	30
1 保健・医療システムの定義と目的		30
2 保健・医療システムの構成要素		30
3 途上国の保健・医療システムの提供体制：タイを事例に		31
4 途上国の保健・医療システムが直面する課題とセラピストの役割		32
5 途上国における社会保障モデル構築に向けて		32
6 途上国における社会保障「地域活用モデル」とは		34
7 日本と途上国の共通課題としての地域創生		34

8	おわりに	35
4	途上国の社会福祉・障害者支援とリハビリテーション	渡辺 長 36
1	従来の障害者支援の問題点	36
2	ミレニアム開発目標	36
3	障害の社会モデル	37
4	途上国における社会モデルの重要性	37
5	具体的事例：タイの障害者政策の概要	38
	1) タイの障害者の生活 2) タイの障害者政策のあり方	
6	障害者に対する訪問サービスの重要性	39
7	セラピストによる途上国ヘルスボランティア教育の重要性	40
	コラム：「あたり前」は存在しない	41
5	途上国におけるPTの現状	石井博之 42
1	各国の理学療法事情例	42
	1) マレーシア 2) 中国 3) マラウイ 4) ヨルダン	
2	途上国における理学療法の現状	44
	1) 運動療法とADL 2) 高齢者リハビリテーションの重要性 3) PTとして途上国で働く魅力	
6	途上国におけるOTの現状	佐藤良子 46
1	途上国のOT有資格者数の現状	46
2	OT養成の状況および普及	46
3	実例	48
	1) リビア人のリハビリテーション技術研修の受け入れ 2) チリでの青年海外協力隊としての活動 3) 途上国におけるOTの意識	
	コラム：地球が回る速さで生活する	50
7	途上国におけるSTの現状	高木亜紀 51
1	途上国では認知度が低い	51
2	STの認知度が低い原因	51
	1) 子どもは労働力である 2) 伝統医療が顕著に残る 3) 途上国での状況は一概ではない	
3	タイでの日本人STの活動例	52
4	途上国におけるSTのこれから	54
	1) コミュニティでの支援方法を考える 2) 専門領域を越えた順応性と判断力をもつ 3) 啓蒙活動や環境づくり、トータル支援も必要になる	

第2章 国際リハビリテーションの実際

1	実施場所と役割	吉田太樹 56
1	活動国と地域	56

2	途上国における日本人セラピストの活動場所	56
3	日本人セラピストが担う役割	58
	■ コラム：ダンスになれば、みなインクルーシブ	61
2	適正技術：臨床技術	小泉裕一 62
1	適正技術の定義	62
2	適正技術を実施するための配慮	62
	1) 文化や習慣に対する配慮 2) 理解に対する配慮 3) 継続性に対する配慮	
3	臨床現場の問題点と適正技術	63
	1) ヒト・モノ・カネの不足 2) リハビリテーションへの理解不足 3) 医学情報の不足	
4	臨床における適正技術の考え方と実践	64
	1) 情報収集のポイント 2) 患者評価のポイント 3) 目標設定のポイント 4) 介入のポイント	
5	臨床現場で患者のリハビリテーション計画を立てる	68
3	適正技術：生活支援技術	中村賢二 70
1	生活支援技術の社会的側面	70
	1) 技術の社会的側面 2) 適正技術：生活支援技術に必要な要素	
2	生活支援技術の適正性の評価	72
	1) 適正性 2) 実例およびチャート表での評価	
3	ものづくり用語	74
4	おわりに	74
	■ コラム：生活支援技術の具体例	75
	1) 食べる 2) 座る 3) 住まい 4) トイレ動作 5) 移動する 6) 着る	
4	適正技術：管理運営技術	小泉裕一 83
1	リハビリテーション部門の管理運営における注意点	83
2	情報管理	83
	1) 問題点と目的 2) 評価表・カルテについて 3) 作成のポイント 4) 記述のポイント 5) 情報集積のポイント	
3	会議運営	86
	1) 問題点と目的 2) 業務管理のポイント 3) ケースカンファレンスのポイント	
4	連携構築	88
	1) 問題点と目的 2) 病棟回診の参加ポイント 3) 病棟カンファレンス参加のポイント	
5	物品管理	89
	1) 問題点と目的 2) Seiri：整理のポイント 3) Seiton：整頓のポイント 4) Seisou： 清掃のポイント 5) Seiketsu：清潔のポイント 6) Shituke：しつけのポイント	
5	適正技術：家族支援	石本 馨 91
1	家族支援の意義	91
2	家族が直面する問題	91
	1) 家族の理解不足 2) 家族の介助力不足 3) 親族や近隣住民からの差別 4) 家族内のジェンダー意識	

3	家族支援の目的	93
	1) 本人のため 2) 家族メンバーのため	
4	家族支援の実践	93
	1) 介助方法の指導 2) 訓練方法の指導 3) 家族が参加できるイベントの開催 4) ピアグループづくり 5) 各種講習会	
5	家族支援で注意すべきこと	96
	1) 実際にする人に、実際の場面で、具体的に、継続できるものを 2) ジェンダーへの配慮	
	コラム：日本の文化を広めよう	97
6	現地での教育・研修小泉裕一	98
1	現地での教育・研修における課題	98
	1) 受容側の問題 2) 供給側の問題	
2	研修企画のポイント	99
	1) 目的 2) 対象、期間 3) 方法 4) 目標 5) カリキュラム、スケジュール	
3	研修立案の実践	105
7	リハの普及・啓発大澤諭樹彦	107
1	住民への啓発	107
	1) 障害に対する理解の低さ 2) リハビリテーションに関する情報不足 3) 地域で効果的な啓発活動を行うためのポイント 4) パンフレット・冊子づくりのポイント	
2	行政担当者への啓発	110
	1) 優先順位の低いリハビリテーション政策 2) 障害者政策・リハビリテーション政策への提言ポイント 3) 各省庁機関との連携強化のポイント	
3	病院内の他科への啓発	112
	1) 急性期リハビリテーションの未整備 2) 病院内リファーマルシステムの構築のポイント	
4	啓発イベントの企画・準備・実施のポイント	113
	コラム：現地オリジナルの治療法を活かせ！	116
8	CBR渡邊雅行	117
1	CBRの理念と定義	117
	1) CBRの理念と定義 2) ソーシャル・インクルージョンとCBID	
2	CBRの運営組織と方法	118
	1) 運営主体 2) 地域社会の資源 3) 障害者の位置づけ 4) CBRサービスとCBRワーカーの役割	
3	CBRの実践例と国際協力	121
	1) ネパールのCBR 2) セラピストの役割	
9	参加型開発石本 馨	123
1	リハビリテーションにおける参加型開発	123
	1) 参加型開発とは 2) 参加型開発の利点	
2	参加の形態	124

3	参加型開発の進め方	125
	1) 情報提供者、相談相手としての参加を促すツール 2) マンパワーとしての参加を促すツール 3) アクター、オーナーとしての参加を促すツール	
4	実施上の注意点	127
	1) 参加を阻害する要因をとり除こう 2) 時間がかかるのを覚悟しよう 3) 視覚化しよう 4) プロセスを大事にしよう	
	コラム：「今」がイチバン大事	129
10	文化	河野 真 130
1	文化とは	130
2	文化を理解し対処する能力	131
3	制約・枠組み、動因・エネルギーとしての文化	132
	1) 制約・枠組みとしての文化 2) 動因・エネルギーとしての文化 3) 制約・枠組みと動因・エネルギーが表裏一体となった文化	
	コラム：現地の文化を活用する（ウズベキスタンのプロフづくり）	134
11	ICFの活用	米本竜馬 136
1	ICFとは	136
	1) 概要 2) ICFモデル 3) ICFの利用	
2	臨床場面におけるICFの活用	137
	1) 評価におけるICFの活用 2) 環境因子への注目 3) 参加への注目	
3	他職種理解におけるICFの活用	140
	1) 他職種理解の必要性 2) 症例検討におけるICFの活用	
4	事例紹介	140
	1) 背景 2) 大洋州リハビリテーション領域広域研修の開催 3) まとめ	
12	関連する国際組織	石井博之 144
1	国際的なリハビリテーション職能団体	144
	1) 理学療法分野 2) 作業療法分野 3) 言語聴覚分野	
2	国際機関	145
	1) 国際連合諸機関 2) アジア開発銀行	
3	日本の政府開発援助機関	146
4	非政府組織	146
	1) 国際協力を直接行っている組織 2) ネットワーク構築や、情報発信、研修などを主な目的としている組織	
	コラム：必要なものは必要なときに用意する	149
13	災害リハビリテーション	三浦 和 150
1	医療からみた災害とは	150
2	災害サイクルとセラピストの役割	151
	1) 第1期：発災～72時間（被災混乱期） 2) 第2期：4日～1カ月末（応急修復期） 3) 第3期：2～6カ月（復旧期） 4) 第4期：6カ月以降（復興期）	

3	リハビリテーションとは	154
	1) 一次リハビリテーション 2) 二次リハビリテーション	
4	復興期におけるコミュニティへの働きかけ	158
14	学術交流	下田信明 160
1	はじめに	160
2	学会・学術集会・研究会・専門誌	161
3	学術集会を企画・運営する際の仕事内容と留意点	164
	コラム：途上国の人々に魅せられる	166
15	キャリアパス	石井清志 167
1	キャリアパスとは	167
2	想定される活動の場	167
3	キャリアパスにおける選択肢	168
	1) 海外留学 2) インターン 3) JICA ボランティア 4) 国連ボランティア 5) 国際 NGO 6) 開発コンサルタント 7) 国際機関の職員 8) 民間企業 9) 海外進出に積極的な病院や施設	
4	想定される業務	170
5	求められる資質や能力	171
6	キャリアパスを考える前に押さえておくべきポイント	172
	1) キャリアパスは「目標」によって大きく変わる 2) 目標を立てる前に情報を集める	
7	キャリアパスの例	172
	コラム：そして、国際リハ・セラピストは故郷に帰る	174

第3章 より深く理解するための10の関連領域

1	開発協力	渡邊雅行 176
1	国際協力における開発	176
	1) 開発と発展の意味 2) 開発と国際連合 3) 人間開発への取り組み	
2	開発における課題	177
	1) 後発開発途上国とは 2) 開発におけるさまざまな課題	
3	障害と開発	178
	1) 障害の考え方 2) 複線アプローチ	
4	開発協力における国際的な枠組み	178
	1) 政府開発援助と開発援助委員会 2) 持続可能な開発目標とミレニアム開発目標	
5	日本の開発協力：開発協力大綱と基本方針	180
2	グローバルヘルス	岩田研二 181
1	グローバルヘルスとは	181

2	グローバルヘルスに対してセラピストにできること	182
	1) 国内 2) 国外	
3	途上国の健康問題	186
	岩田研二	
1	途上国の健康問題と国際リハビリテーションの関係	186
	1) 感染症から非感染性疾患、死亡から障害の時代 2) セラピストも知っておかなければなら ない問題	
2	世界の平均寿命	187
3	途上国の主要な健康問題	188
	1) ミレニアム開発目標 (MDGs) 達成に対する最終評価	
4	途上国のメンタルヘルス	192
	河野 真	
1	途上国のメンタルヘルスニーズ	192
2	途上国のメンタルヘルス資源	193
3	メンタルヘルス分野における国際リハビリテーション	194
	1) 精神障害・精神疾患の当事者への直接的なリハビリテーションサービスの提供 2) メンタル ヘルス専門家の養成 3) 地域社会や関係者の啓発・教育	
5	途上国の高齢化	197
	知脇 希	
1	世界の高齢化	197
2	高齢化の要因	198
3	途上国の高齢化と国際リハビリテーション	199
6	プライマリ・ヘルスケア (PHC)	201
	渡辺 長	
1	PHC の理念	201
2	PHC の基本活動項目	202
3	コミュニティにおける PHC 活動の基本理念	202
4	途上国における今後の PHC のあり方	203
5	PHC による問題を上流から解決する視点	204
6	PHC におけるセラピストの役割	204
	1) 住民をカウンターパートとする PHC 活動 2) セラピストをカウンターパートとする PHC 活動 3) 病院における PHC 活動	
7	世界における障害者の実情	207
	知脇 希	
1	障害者の数	207
2	障害者の教育、就労	207
3	障害とジェンダー	208
4	障害当事者団体	208
5	障害と国際リハビリテーション	209
8	国際的な障害者支援の動向	210
	石井清志	
1	途上国における障害者の現状	210

2	障害者支援における障害のとらえ方の変化	210
3	インクルーシブな開発をめざして	211
	1) 障害者の権利に関する条約（障害者権利条約） 2) 障害者の権利実現のためのインチョン戦略 3) 持続可能な開発目標（SDGs）	
4	国際的な障害者支援の動向と国際リハビリテーション	213
9	途上国の障害者と教育	石井清志 215
1	開発における教育の重要性	215
2	障害児教育の現状	215
3	各段階における障害児教育の現状	216
	1) 就学前教育 2) 初等・中等教育 3) 職業訓練・高等教育	
4	活動の際に役立つ知識	219
	1) 教育の型（フォーマル、ノンフォーマル、インフォーマル教育） 2) インクルーシブ教育	
5	国際リハビリテーションにおける教育支援	220
10	途上国の障害者と就労	石本 馨 221
1	途上国における障害者の就労	221
	1) 就労の現状 2) 就労の場所 3) 就労の意義	
2	就労を阻む障壁	223
	1) アクセスの欠如 2) 障害に関する誤解	
3	途上国での就労支援と国際リハビリテーション	224
	1) 障害者個人への介入 2) 会社、社会への介入 3) 就労支援の方向性	

第4章 国際リハプロジェクトはじめて立案ワークブック

1	国際リハビリテーションプロジェクトとは	河野 真 228
1	プロジェクトとプログラム	229
2	国際協力プロジェクトの実施組織	230
3	国際協力プロジェクトの財源	230
4	国際リハビリテーションプロジェクトとは	231
2	プロジェクト立案の考え方	石本 馨 232
1	PDCA サイクルとは	232
2	プロジェクト評価の視点	233
	1) 評価の目的 2) 評価基準 3) モニタリング	
3	プロジェクト立案・実施管理の方法	234
	1) 参加型であること 2) ワークショップを活用すること	
4	プロジェクト立案の流れ	235
	1) ステークホルダーを分析する（ステークホルダー分析） 2) 対象地域の問題を把握する（問題分析） 3) プロジェクトの目的を設定する（目的分析） 4) プロジェクト実施計画を立案する（計画立案） 5) 4つのステップを体験しよう	

③	ステークホルダー分析	石本 馨	237
1	ステークホルダーとは		237
2	ステークホルダーを分析する		237
	1) ステークホルダーをあげる 2) ステークホルダーを分類する 3) 主要なステークホルダーを選び出し、さらに分析する 4) 主要なステークホルダーをさらに分析する 5) ターゲットグループを仮決める		
④	問題分析	知脇 希	241
1	問題分析とは		241
2	地域の問題を分析する		241
	1) 対象地域の問題点をあげる 2) 列挙した問題のなかから中心とする問題を定める 3) 中心とする問題の直接的な原因を特定する 4) 直接的な原因の特定をくり返す 5) 中心とする問題の直接的な結果を特定する 6) 問題系図を完成させる		
⑤	目的分析	田中紗和子	246
1	目的分析とは		246
2	プロジェクトの目的を考える		246
	1) 中心とする目的を決める 2) 中心とする目的を実現するための直接的な手段を特定する 3) 直接的な手段の特定をくり返す 4) 中心とする目的が直接的な手段となって達成される状態を特定する 5) 目的系図を完成させる		
⑥	計画立案	田中紗和子	251
1	計画立案とは		251
2	プロジェクト立案の手順		251
	1) 目的系図からプロジェクト目標を選択する 2) プロジェクトの対象地域、ターゲットグループを選択する 3) プロジェクト目標にあったプロジェクト名を考える 4) 上位目標を設定する 5) 成果を選択する 6) 目標や成果が達成されたかどうか判断する指標を決める 7) 活動を考える		
⑦	参考課題事例①ウズベキスタン	河野 眞	255
	■ ウズベキスタンの事例からプロジェクトを立案しよう		255
1	立案ワーク実施ヒント		256
2	事例紹介		256
	1) ウズベキスタンのコミュニティ 2) 障害当事者たちの状況		
3	対象地域の概要		257
4	医療・リハビリテーションの状況		258
5	障害者（児）の状況		259
⑧	参考課題事例②ニカラグア	田中紗和子	261
	■ ニカラグアの実例からプロジェクトを立案しよう		261
1	立案ワーク実施ヒント		262
2	事例紹介		262
	1) 対象施設：ロス・ビピートス 2) 対象地域：フィガルバ 3) ロス・ビピートス フィガルバ		
3	対象地域の概要		266

4	医療・リハビリテーションの状況	267
5	障害者（児）の状況	268
	1) 障害者に関する法制度 2) 障害者の統計 3) 日常生活でみかける障害者 4) 障害者関連のイベント	
■	活動先でプロジェクトを立案しよう	270

第5章 実例でみる国際リハビリテーションの進め方

①	フィジーにおける青年海外協力隊PT派遣	知脇 希	272
1	はじめに		272
2	フィジーにおける協力隊活動		272
	1) フィジーと活動先の概要 2) 病院での活動 3) 村訪問（Community Outreach Program） 4) 任期中盤：後任要請の検討 5) 任期後半：研修会の計画		
3	帰国後：大学院での振り返り		275
4	調査で知った協力隊活動の変遷とその後の広がり		275
5	協力隊派遣の先にみえたもの		277
②	バングラデシュのスラムから	石本 馨	278
1	参加のきっかけ		278
2	ダッカでの活動		279
	1) 派遣先の概要 2) 活動方針の設定 3) 職業準備訓練 4) たまり場プログラム		
3	活動から得た教訓		283
	1) 現状把握に時間をかける 2) スタッフの得意分野を活かす 3) でも、予定通りには進まない		
4	おわりに		283
③	タンザニアでの「日本式」導入の試み	宇津木隆	284
1	はじめに		284
2	診療への日本式導入活動		285
	1) 派遣先の概要 2) 活動のきっかけ 3) 効率のよい診療に向けて 4) その後の展開		
3	運動習慣啓発に向けた活動		287
	1) 活動のきっかけ 2) 運動習慣啓発に向けた活動 3) その後の展開		
4	活動から学んだこと		288
	1) マンパワーになり過ぎない 2) 異文化に一喜一憂しすぎない 3) 助け合う文化と上手につき合う		
④	ミャンマーでのリハビリテーション強化プロジェクト	大澤諭樹彦	290
1	はじめに		290
2	プロジェクトの概要		291
	1) プロジェクトの目標 2) 国立リハビリテーション病院の概要 3) プロジェクトの成果		

3	オーナーシップを高めるための取り組み	292
	1) プロジェクトの計画立案 2) プロジェクト実施の体制づくり 3) 成果達成の共有化 4) プロジェクト終了後の活動計画	
4	おわりに	296
5	タジキスタンの教育支援を通じて大室和也	297
1	はじめに	297
2	筆者が勤めている NGO	298
3	AAR Japan のタジキスタン事業と国際リハビリテーション	298
	1) AAR Japan のタジキスタン事業 2) 事業へのセラピストのかかわり	
4	今後について	301
6	カンボジアへの病院丸ごと輸出亀田佳一	302
1	カンボジアへの「病院丸ごと輸出」事はじめ	302
	1) カンボジアの医療レベル 2) 病院丸ごと輸出の概要	
2	北原ジャパンクリニックでの事業	303
3	カンボジア人患者の特徴	304
	1) 医療知識の極端な低さ 2) 民間療法への傾倒 3) 所得による住宅環境の違い	
4	カンボジア人 PT の教育	305
5	おわりに	306
7	ニカラグアで気づき、受け入れ、行動する寺村 晃	309
1	はじめに	309
2	ニカラグアの障害事情	310
3	特別支援学校の活動	310
	1) 特別支援学校の状況 2) 実際の活動	
4	早期療育部門（訪問リハビリテーションと関連業務）	312
	1) 活動内容 2) 持続的なサービスに向けて	
5	おわりに	315
8	パラリンピックをめざしたペルーでの活動広田美江	316
1	はじめに	316
2	参加のきっかけ	317
3	日本とペルーの関係	317
4	ペルー人の国民性	317
5	配属先で求められていたもの	318
	1) 配属先 2) 活動案件と課題 3) 最初の活動	
6	ペルー理学療法の底力を引き出す	319
	1) スポーツ促進チーム結成 2) 創意工夫：物づくり 3) 人を育てる 4) その後の展開	

7	日本理学療法の底力を引き出す	319
	1) 短期ボランティアの要請および活動 2) 創意工夫：イベント開催 3) 人を育てる 4) その後の展開	
8	日本ペルー友好障害者リハビリテーション写真展	320
9	おわりに	321
9	ネパールでの精神科リハビリテーション	藤本 理 322
1	きっかけは「でも、OTをしたいなあ」	322
2	ネパールといえば	323
	1) ネパールの暮らしと医療 2) ネパールの精神保健	
3	OTとしての活動展開	323
	1) いつも患者さんのそばで 2) スタッフを育てる 3) コミュニティへのアウトリーチ 4) 「作業療法を教える人」になる	
4	忘れられない言葉	326
	1) 1つの点 2) 幸せとは 3) 日本人なのにネパール語 4) あなたはOT	
5	国際協力とOT	327
10	バングラデシュでないものを1から創り上げる	山田（井立）由紀 328
1	参加のきっかけ	328
2	会話と食事が好きなバングラデシュ人	329
3	バングラデシュの言語聴覚療法科	329
4	現地語で行われない授業	330
5	ないものを1から創り上げる	331
	1) 配属先に必要なもの 2) 検査の作成 3) ボランティアが意識すべきこと	
6	「自分は邪魔者になっているのでは」という不安とスタッフからの評価	332
7	教えたことよりも、教わったことが多い	333
●	巻末付録	335
1	現地で使える指さし臨床用語集	渡邊純子 336
2	現地で使える図表集	340
3	国際リハ関連組織・団体ダイレクトリー（名称と役割）	春原るみ 347
●	索引	351